紡績業における人材育成と環境対応

山 本 哲 彦

現在、わが国の紡績業を取り巻く環境は、国内市場の不振に加えて昨年後半からの二次製品輸入の急増で一段と厳しさを増してきている。今後、輸入品との棲み分けを図りつつ、国内の生産基盤を維持していくためには、国際競争力の源泉である技術競争力の強化にこれまで以上の努力が必要となってきた。すでに日本紡績協会では、業界共通の課題として平成10年度から技術競争力向上の人材育成事業に取り組んできた。本年は3年目を迎え、初年度から実施している中堅技術者を対象とした紡織部門の保全技術の実習に加えて、染色加工部門も対象とすることとなり、昨年一年間をかけて染色加工技術者が執筆した「染色加工教本」を用いて染色加工セミナーを実施した。セミナーの対象は入社10年前後の技術者で、将来工場の要となる人材の育成を目指している。

紡織部門の研修事業は各工程での実習を終え、巻糸工程などは二巡目に入っているが、研修終了後の技術者はそれぞれの現場に復帰後、修得した技術の伝承と定着に努力しており、紡績各社の技術力を根底からレベルアップしていく原動力になるものと期待されている。

一方、昨年9月に出された「循環経済型ビジョン」の繊維産業に関する方針に基づき、日本紡績協会としても、綿製品の3R(リユース、リデュース、リサイクル)に取り組むこととなった。通商産業省の調査によると衣類の廃棄量は年間100万t強に達し、スチール缶の廃棄重量にはほぼ匹敵し、体積比で考えると莫大な量になると指摘されている。綿花は腐敗性があり、自然に還ることから本来環境にやさしく、エコロジカルな天然繊維であるが、繊維製品の性格上、一般雑パイルとして大部分が廃棄焼却処分

されている実態から環境への影響についての対応が必要と考える。

すでに廃棄の難しい布団やカーペットについては、早くからリサイクルの品目指定を受け、RDF(固形化燃料)化の方法を模索してきているが、昨今のダイオキシン問題できめ細やかな対応を迫られている。ウール製品についても従来からわが国で行われている反毛技術を応用して再製品化やフェルトなどへの転用を進めている。また、合繊業界ではポリエステルやナイロンで完全リサイクルを目指して様々な試みがなされているが、現時点ではリサイクル衣料として活用されているのはペットボトルの再生ポリエステルを混用したエコ製品が中心である。

しかし、綿製品の実用衣料については本格的なリサイクル事業に取り組んでいるケースは少ない。綿製品の場合はウールと異なり、綿花の特性上、反毛化によって繊維長が短くなり、紡績糸などに再用することが非常に困難な状況にあるためである。このため、日本紡績協会としては今年度の調査事業として①反毛技術の向上、②反毛を用いた衣料の開発、③反毛を用いたパネル材の開発について取り組み、さらに今後、現実的な対応を模索していくこととしている。

リサイクル製品はコストおよび品質面においても同種の競合製品に比べて劣位となる部分が多い。しかし、環境対策は今後の重要課題であり、日本紡績協会としては紡績各社の優れた技術力と開発力および関連する技術者の知恵と努力を傾注してこれらの難点を克服し、人材育成事業と並ぶ重要な事業として今後も継続実施していきたいと考えている。

Development of Human Resources and Correspondence to Environment in the Spinning Industry

著者紹介 TETSUHIKO YAMAMOTO

Kurabo Co., Ltd.

倉敷紡績株式会社 取締役 綿合繊副事業部長、日本紡績協会技術委員長

著者は、紡績、織布、加工仕上を専門とされている。

本稿では、紡績業における人材育成と環境対応について、今後の展望を述べていただいた。